

女子短大生における進路選択と進路指導
—— 自己成長力と進路決定自己効力からの検討 ——

泉 水 清 志

Career Decision-making of Women's Junior College
Students and Career Guidance :
An Examination of Self-growth Motivation
and Career Decision-making Self-efficacy

Kiyoshi Sensui

Abstract

The purpose of this study was to examine effects of career decision-making by measuring self-growth motivation and career decision-making self-efficacy of women's junior college students, and to examine career guidance in junior college. A questionnaire was administered to 397, including 286 qualification major and 111 general education major, with women's junior college students. Results showed that self-growth motivation was higher with second-year and general education major students, that career decision-making self-efficacy was higher with second-year and qualification major, and that both of them were higher with students who successfully received a job offer. It is suggested that increasing self-growth motivation and career decision-making self-efficacy in career guidance has effects on student's future career.

Keywords: career decision-making, career guidance, self-growth motivation,
career decision-making self-efficacy, women's junior college students

キーワード: 進路選択, 進路指導, 自己成長力, 進路決定自己効力, 女子短大生

1. 問 題

1) 進路指導・キャリア教育

進路指導は、「自己の人生設計のもとに、進路を選択・実現し、さらに卒業後のキャリアにおいて自己実現を図るように指導すること」と定義され(藤本, 1985), キャリア教育は、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的

に進路を選択する能力・態度を育てる教育」であると定義されている(文部科学省, 2007)。すなわち、自立的・主体的に職業選択を行い、選択した職業に就くことや、将来まで見据えた目的に基づいて進路選択を行い、自己実現を果たすことが理想とされている。このことから、キャリア教育や進路指導とは、進路選択の結果よりも進路選択に必要な力や選択過程自体を重視するものといえる。

進路指導に関する研究では、個人の生き方やあり方についての指導を強調するものやキャリア・カウンセリングにおける開発的、発達援助的機能を重視するもの、職業を含めた人生への包括的、開発的関わりに関するものがあり、自分で自分の人生を生きていく力、自分のキャリアの中で自己実現をしていく力を育成することが重要視されている(浦上, 1996)。しかし、実際は就職希望者に対して自分に最も適した就職先を発見させ、その就職を援助するといった進路指導が行われているのが現実である。なぜなら、就職先や就職率が大学や短大の評価や学生募集に直結するため、卒業予定者をいわゆるフリーターではなく、正社員として就職させることを重要視している。しかし、大卒者の3割が3年以内に、しかも自主的に離職するといった、若年層の離職率の増加がみられ、進路が決められないという相談件数が増加しているのも事実である。また、職業選択・決定を重視しすぎるために、主体的に選択できないことや職業で自己実現できないことを挫折とみなしたり、仕事に個性を発揮したいという意識やそれが分からないためにさまざまなことを経験したいという気持ちからフリーターになるものも多いとされている。さらに、職業選択や決定が選択肢の幅を狭めて就職を困難にし、就職後の現実と理想とのギャップを大きくしている可能性もある。このことから、就職内定先が得られたかどうかのみを重視した進路指導は理念的に不十分であるだけでなく、限界であるともいえよう。学生の就職活動や進路決定行動が今後のキャリアに肯定的な影響を与えることをふまえ、その援助を行っていくという観点で進路指導やキャリア教育を考えることが必要である。

2) 自己成長力

現代において、企業は「人間力」のある人材を求めているといわれている(大久保・石田・西田, 2007)。人間力とは、「社会を構成し運営すると

もに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合学力」と定義されており、「人間性、基本的な生活習慣」「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」などを含むと考えられている。これらは、実務能力に人間の本質により近い特徴を加えたものであるが、実務能力とは異なり、トレーニングなどで簡単に身につけることができないとされている。企業が人間力を求める理由として、企業の発展は社員の人間力の総和に依存すると考えられていることがあげられる。従来は、トップの方針・指示命令を社員が忠実に実行するというスタイルが一般的であり、企業における上位者はさまざまな方針を作成し、下位者はそれを実行するという役割分担によって企業は運営されていた。しかし、急激な社会変化とともにスピードが要求されるようになり、このスタイルでは対応できないことが増加してきた。指示に従うだけでなく、自分で瞬時に判断し、行動しなければならず、そのためには人間力が必要であると考えられている。

速水・西田・坂柳ら(1994)は、「自ら自分自身を伸ばしていこうとする力」として「自己成長力」という概念を提案している。これは、自らをより高めていこうとする態度や力であるとされ、キャリアでの自己実現という視点からも、自らをより高めていこうとする態度や力が重要であり、個人のあらゆる側面に主体的、開発的に関与するようになると考えられている。また、就職活動中に自分自身を振り返り、これから何をしたいのか、何ができるかを考え、自分自身が成長できるような職業先選択を行うことから、自己を高めようとする意識が働いているとされている。浦上(1996)は、女子短大生の就職活動を通しての自己成長力は、自己や職業の情報を集め、統合することや、自分の活動について振り返り、吟味することによって増大することを示し、内定が得られたか否かという要因は影響せず、就職活動を行うこと自体がその発達につながるとしている。

3) 進路決定自己効力

職業選択や決定について検討する際、進路選択に対する自己効力感が、職業未決定に援助的介入を行うために有効な概念であるとされている。自己効力感とは、ある具体的な状況において適切な行動を成し遂げられるという予期や確信のことであり、ある行動がどのような結果を生み出すのかという結果予期と、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのかという効力予期に分けられる。これは、ものごとに対する努力や粘り強さを規定するため、その行動を予測するとされている(Bandura, 1977)。自己効力感を高めるには、失敗よりも成功に注意を向け、成功の可能性が高いことをくり返し行って、徐々にできるという信念を形成するのがよいと考えられている(Bandura & Schunk, 1981)。Taylor & Betz (1983)はこの概念を進路選択に応用し、大学生を対象として進路決定自己効力尺度(Career Decision-Making Self-Efficacy Scale: CDMSE)を作成した。この尺度は、目標選択、自己認識、職業情報の収集、将来設計、課題解決の5つの要素から構成され、自己効力と進路不決断との間には負の相関が見出されている。

富安(1997)は、この尺度に基づいて大学生用進路決定自己効力尺度日本語版(CDMSE-U:J)を作成し、大学4年生では進路決定自己効力の全体得点は5つの進路決定行動と関連があること、特に情報収集行動と計画立案行動についてはその予測因になりうること、進路選択自己効力が多くの進路決定行動と関連していることを明らかにし、その重要性を示している。

4) 本研究の目的

短期大学生は卒業までが2年間と短いために、職業の探索を行い、自己の興味・関心について吟味する期間にゆとりがなく、将来の進路について十分に考え、決定へと至る前に職業選択の時期を迎えるとされている(安達, 2001)。このことから、

女子短大生に対する職業選択の援助や介入に役立つ指針を得ることがきわめて重要であると考えられ、就職活動を通して自らの自己成長力や自己効力を高めることが今後のキャリアに大きく影響することから、そのための援助を進路指導やキャリア教育を通して行うことが重要であると思われる。その中でも、特別な資格の取得を目指し、入学前に進路選択を行った資格学科学生と、一般的な教養や専門知識の修得を目的とし、明確な進路選択を行っていない教養学科学生とでは、有効な進路指導やキャリア教育が異なることが推測される。

よって、本研究は女子短大における資格学科学生と教養学科学生の自己成長力、進路決定自己効力を比較することによってその進路選択の効果について検討し、短大における進路指導、キャリア教育について検討することを目的とした。

2. 方法

1) 調査対象者：群馬県内女子短大生397名。うち、資格学科学生286名(1年生131名, 2年生155名)、教養学科学生111名(1年生49名, 2年生62名)。

2) 調査内容・項目：

(1) 自己成長力(36問)：「能力」「性格」「体力」の3領域を尺度とした「自己成長力検査」(速水ら, 1994)に「生き方」に関する領域(浦上, 1996)を加え、3階層(「関心」「意欲」「遂行力」)について、「よくあてはまる(4)」から「ほとんどあてはまらない(1)」まで、4件法で回答を求めた。

(2) 進路決定自己効力(25問)：大学生用進路決定自己効力尺度日本語版(CDMSE-U:J; 富安, 1997)から、5つの下位尺度(「進路選択」「情報収集」「自己評価」「計画立案」「問題解決」)について、「完全に確信できる(9)」から「全く確信できない(1)」まで、9件法

で回答を求めた。

(3) フェイス・シート項目：

- ① 学年
- ② 進路決定状況（2年生のみ）

3) 調査時期：2006年12月中旬（資格学科）および2007年10月中旬（教養学科）に実施した。

3. 結 果

1) 自己成長力

表1は、調査対象者の自己成長力と4領域の得点平均（標準偏差）を学科、学年ごとにまとめたものである。自己成長力について、学科(2)×学年(2)の2要因分散分析を行った結果、有意差

はみられなかった。しかし、表1より資格学科では1年生より2年生のほうが高い得点を示すことが分かった。

表2～5は「能力」「性格」「体力」「生き方」の4領域について、3つの階層（「関心」「意欲」「遂行力」）の得点平均（標準偏差）を学科、学年ごとにまとめたものである。階層(3)×学科(2)×学年(2)の3要因分散分析を行った結果、「能力」の領域においては学科の主効果がみられ ($F(1,1182)=3.475, p<.1$)、下位検定の結果、資格学科学生より教養学科学生のほうが高い得点を示すことが分かった。また、「体力」の領域においては学科および学年の主効果 ($F(1,1182)=3.674, p<.1$; $F(1,1182)=3.708, p<.1$)、学

表1 自己成長力の平均値と標準偏差

	学科	資 格			教 養		
	学年	1年	2年	計	1年	2年	計
能力自己成長力	M SD	2.721 0.688	2.750 0.706	2.737 0.698	2.791 0.735	2.828 0.763	2.812 0.750
性格自己成長力	M SD	2.858 0.718	2.927 0.724	2.896 0.722	2.912 0.681	2.931 0.743	2.922 0.716
体力自己成長力	M SD	2.562 0.727	2.727 0.764	2.652 0.751	2.558 0.813	2.563 0.730	2.561 0.766
生き方自己成長力	M SD	2.920 0.719	2.991 0.755	2.959 0.739	2.980 0.677	2.955 0.708	2.966 0.694
自己成長力	M SD	2.682 0.417	2.784 0.439	2.737 0.431	2.748 0.397	2.780 0.437	2.770 0.418

表2 能力自己成長力階層の平均値と標準偏差

	学科	資 格			教 養		
	学年	1年	2年	計	1年	2年	計
関 心	M SD	2.837 0.588	2.871 0.636	2.856 0.614	3.061 0.512	2.979 0.653	3.015 0.594
意 欲	M SD	3.140 0.541	3.112 0.568	3.125 0.555	3.197 0.548	3.199 0.555	3.198 0.549
遂 行 力	M SD	2.186 0.558	2.267 0.628	2.230 0.597	2.116 0.617	2.307 0.769	2.222 0.707

科と学年の交互作用 ($F(1,1182)=3.291, p<.1$) がみられ、下位検定の結果、教養学科学生より資格学科学生のほうが、1年生より2年生のほうが高い得点を示し、教養学科学生では学年によって得点差がないのに対し、資格学科学生では1年より2年のほうが高い得点を示すことが分かった。さらに、すべての領域において階層性の主効果がみられ (能力: $F(2,1182)=214.605, p<.001$; 性格: $F(2,1182)=208.616, p<.001$; 体力: $F(2,1182)=140.270, p<.001$; 生き方: $F(2,1182)=114.625, p<.001$)、意欲、関心、遂行力という順に高い得点を示すことが分かった。

表6は、2年生の自己成長力について、内定の有無、学科ごとにまとめたものである。内定の有無(2)×学科(2)の2要因分散分析を行った結果、有意差はみられなかった。しかし、表6より資格学科学生では内定なしより内定ありのほうが

高い得点を示すことが分かった。また、下位尺度(4)×内定の有無(2)×学科(2)の3要因分散分析を行った結果、下位尺度の主効果がみられ ($F(1,862)=12.952, p<.001$)、下位検定の結果、生き方、性格、能力、体力の順に高い得点を示すことが分かった。

2) 進路決定自己効力

表7は、調査対象者の進路決定自己効力と5つの下位尺度の得点平均(標準偏差)を、学科、学年ごとにまとめたものである。進路決定自己効力について、学科(2)×学年(2)の2要因分散分析を行った結果、学科および学年の主効果がみられ ($F(1,393)=7.102, p<.01$; $F(1,393)=8.656, p<.01$)、下位検定の結果、教養学科学生よりも資格学科学生のほうが、1年生よりも2年生のほうが高い得点を示すことが分かった。

表3 性格自己成長力階層の平均値と標準偏差

	学科	資 格			教 養		
	学年	1年	2年	計	1年	2年	計
関 心	M	2.985	3.032	3.011	3.122	3.129	3.126
	SD	0.585	0.603	0.594	0.503	0.625	0.572
意 欲	M	3.290	3.348	3.322	3.279	3.258	3.267
	SD	0.585	0.563	0.573	0.567	0.623	0.596
遂 行 力	M	2.300	2.400	2.354	2.333	2.403	2.372
	SD	0.595	0.657	0.630	0.561	0.681	0.629

表4 体力自己成長力階層の平均値と標準偏差

	学科	資 格			教 養		
	学年	1年	2年	計	1年	2年	計
関 心	M	2.667	2.776	2.726	2.660	2.629	2.643
	SD	0.654	0.716	0.689	0.672	0.678	0.672
意 欲	M	2.906	3.110	3.016	2.905	2.914	2.910
	SD	0.663	0.668	0.672	0.785	0.576	0.673
遂 行 力	M	2.115	2.295	2.212	2.109	2.145	2.129
	SD	0.628	0.681	0.662	0.777	0.718	0.742

表5 生き方自己成長力階層の平均値と標準偏差

	学科	資 格			教 養		
		学年	1年	2年	計	1年	2年
関 心	M	3.104	3.163	3.136	3.177	3.151	3.162
	SD	0.679	0.705	0.693	0.545	0.615	0.582
意 欲	M	3.150	3.280	3.220	3.279	3.204	3.237
	SD	0.659	0.622	0.642	0.563	0.622	0.595
遂 行 力	M	2.506	2.531	2.520	2.483	2.511	2.499
	SD	0.634	0.711	0.676	0.631	0.674	0.653

表6 2年生の自己成長力

	内定 学科	あ り			な し		
		資格	教養	計	資格	教養	計
能力自己成長力	M SD	2.789 0.510	2.751 0.560	2.779 0.520	2.671 0.727	2.942 0.579	2.759 0.556
性格自己成長力	M SD	2.987 0.497	2.961 0.548	2.980 0.509	2.801 0.565	2.884 0.574	2.828 0.566
体力自己成長力	M SD	2.755 0.561	2.631 0.528	2.723 0.554	2.669 0.702	2.462 0.606	2.602 0.675
生き方自己成長力	M SD	2.984 0.593	2.916 0.956	2.966 0.592	3.002 0.619	3.013 0.463	3.006 0.570
自己成長力	M SD	2.819 0.550	2.815 0.569	2.862 0.555	2.786 0.617	2.826 0.591	2.799 0.608

表7 進路決定自己効力の平均値と標準偏差

	学科	資 格			教 養		
		学年	1年	2年	計	1年	2年
進 路 選 択	M SD	5.835 1.381	6.252 1.280	6.061 1.341	5.237 1.358	5.687 1.258	5.488 1.316
情 報 収 集	M SD	6.093 1.416	6.445 1.302	6.284 1.365	5.604 1.452	6.136 1.190	5.901 1.332
自 己 評 価	M SD	6.782 1.220	7.133 1.108	6.972 1.172	6.535 1.108	6.903 1.078	6.741 1.102
計 画 立 案	M SD	5.681 1.207	5.890 1.192	5.794 1.201	5.555 1.195	5.813 1.120	5.699 1.156
問 題 解 決	M SD	5.830 1.362	6.142 1.313	5.999 1.342	5.612 1.353	5.845 1.375	5.742 1.364
進路決定自己効力	M SD	6.044 1.373	6.372 1.308	6.222 1.348	5.709 1.360	6.077 1.279	5.914 1.327

表8 2年生の進路決定自己効力

	内定	あ り			な し		
	学科	資格	教養	計	資格	教養	計
進路選択	M SD	6.465 1.234	6.081 1.167	6.365 1.225	5.827 1.264	5.104 1.178	5.592 1.275
情報収集	M SD	6.654 1.196	6.292 1.205	6.559 1.204	6.042 1.412	5.904 1.152	5.997 1.327
自己評価	M SD	7.244 1.007	7.216 1.108	7.237 1.031	6.912 1.259	6.440 0.860	6.758 1.160
計画立案	M SD	5.965 1.124	6.081 1.231	5.996 1.150	5.758 1.914	5.416 0.800	5.647 1.177
問題解決	M SD	6.169 1.309	6.108 1.304	6.153 1.304	6.104 1.326	5.456 1.411	5.894 1.379
進路決定自己効力	M SD	6.500 1.254	6.356 1.270	6.462 1.259	6.129 1.369	5.664 1.181	5.978 1.328

表8は2年生の進路決定自己効力について、内定の有無、学科ごとにまとめたものである。内定の有無(2)×学科(2)の2要因分散分析を行った結果、内定の有無および学科の主効果がみられ($F(1,214)=12.404, p<.001$; $F(1,214)=4.065, p<.05$)、下位検定の結果、内定なしより内定ありのほうが、教養学科学生より資格学科学生のほうが高い得点を示すことが分かった。また、下位尺度(5)×内定の有無(2)×学科(2)の3要因分散分析を行った結果、下位尺度、内定および学科の主効果($F(4,1078)=29.491, p<.001$; $F(1,1078)=40.367, p<.001$; $F(1,1078)=13.228, p<.001$)、内定の有無と学科の交互作用($F(1,1078)=3.671, p<.1$)がみられ、下位検定の結果、自己評価、情報収集、問題解決、進路選択、計画立案の順に高く、内定なしよりも内定ありのほうが、教養学科学生より資格学科学生のほうが高い得点を示すことが分かった。また、資格学科よりも教養学科において、内定の有無の差は大きいことが分かった。

4. 考 察

1) 自己成長力

自己成長力について、学科および学年間で有意差はみられなかったが、表1より資格学科の1年生は2年生や教養学科学生と比べて低いことが推測された。このことから、早期に進路選択を行うことが自己成長力を高めることにはつながらないと考えられる。短大での進路選択は、職業の探索を行い、自己の興味・関心について吟味する期間にゆとりがないため、将来の進路について十分に考え、決定へと至る前に職業選択の時期を迎えるといわれている(安達, 2001)。短大入学前に進路選択を行うことは、短大で進路選択を行うよりも時間的なゆとりがないことが推測される。自己の興味・関心や能力・生き方について深く考えて進路選択を行わなかったため、その選択や決定が自己成長力の増大につながらず、他の学生よりも自己成長力が低いという結果になったのではないだろうか。これに対し、教養学科学生は自らの興味・関心に基づいて専門的知識を学び、獲得することを目的とし、それらを将来の職業に生かすことを

期待して短大に入学していると思われる。明確な進路選択はしていないものの、自己の興味・関心については入学前に吟味していることが、自己成長力の増大につながっているのであろう。このことは、教養学科学生有能力自己成長力が資格学科学生より高いことから考えられることである。資格学科学生に対しては、内定を得ることや就職先での働き方を指導するだけでなく、自己の興味・関心について深く吟味させ、進路選択を振り返るといった進路指導やキャリア教育を行うことが、自己成長力を高めるために必要であろう。

一方、教養学科では1年生と2年生の差が明らかではなかった。その1つの要因として、体力自己成長力が有意に低いことがあげられる。調査対象となった資格学科では授業や実習などで体を動かす機会が多く、体力が職業に直接関連しているという意識を高く持っているが、教養学科では持ちにくいと思われる。あらゆる職業において体力は基本であるため、その意識を高めることが体力自己成長力の増大という点からは有効であり、自己成長力の増大にもつながるであろう。しかし、それだけではなく、他の領域をさらに高めるように指導することも、2年生の自己成長力を高めるためには考慮しなければならない。現代の企業では、「明るさ」や「優しさ」が求められているといわれている（大久保・石田・西田，2007）。明るさとは、ものごとのプラス面もマイナス面も正確に見ることができる、すなわち客観的にものごとを見ることができることであり、このことが成績向上だけでなく、職場内の雰囲気高めることにつながるとされている。また、優しさとは周りの人々に対する配慮をもつことであり、特にその場だけを考えて短期的な優しさではなく、その後の成長までも含んだ長期的な優しさが必要とされている。この両者は、性格自己成長力や生き方自己成長力の高さに関連しているものであろう。進路指導やキャリア教育において、自らの性格や生き方、特に明るさや優しさについて考えさせ、経験させ

ることが自己成長力をより高めることになると思われる。そして、社会や企業の求める人材を育成することにつながり、後のキャリアに肯定的な影響をもたらすことが期待できるのではないだろうか。

表2～5より、すべての階層において意欲、関心、遂行力の順に高いことが明らかとなった。これは、速水ら（1994）によっても指摘されているように、関心がまず満たされ、その次に意欲、さらに両者を満たした者の中で遂行力が実行されるという理想とは異なり、意欲や関心は高く持てても、それらを実行していくことが困難である傾向を示していると考えられる。しかし、自己成長力の増大という点からは、成長目標に対して主体的に責任を持って取り組もうとする意欲とともに、その目標に向かって実際に努力していくといった遂行力が必要である。進路選択や就職活動においても、意欲や関心だけでなく、実際に行動することが進路決定や内定先を得ることにつながると推測される。しかし、実際の進路指導は、卒業後のキャリアに対して満足感が得られるように、学生が興味・関心のある職業や適性を発見させることに重点を置いて行われている。進路指導やキャリア教育において、学生自身の意欲・関心から実際の行動へ導くようにすることが、自己成長力を高めるだけでなく、進路決定や就職活動にも肯定的な影響を与えるであろう。

内定の有無による自己成長力に有意差はみられなかったが、表6より特に資格学科では内定を得た学生は高いことが推測された。浦上（1996）は、就職活動と自己成長力の増大との関連に、内定が得られたか否かという要因は影響を及ぼすとはいえないとし、活動の中で自分自身を見つめたり、活動を振り返ることが自己成長力を増大させている。本研究結果はそれに反するものであるが、資格学科は短大卒業後に資格を生かせる職種に就職することを目標としているため、内定を得ることは目標が達成できたことになり、自己成長

力が増大したのではないだろうか。逆に、内定を得られていない学生は目標が達成できないことにとらわれ、自分自身を見つめ、活動を振り返ることをしていないために自己成長力が高まっていないと考えられる。また、高い自己成長力をもつ学生が内定を得ることができたということもあるだろう。しかし、内定が得られたかどうかではなく、就職活動を行うことによって自己成長力が増大することが、今後のキャリアにおいて肯定的な影響をもたらすと思われる。進路指導やキャリア教育において、進路選択の結果を重視するのではなく、その過程を重視し、就職活動によって何が得られるかを学生に意識させることが重要であり、進路決定や内定先獲得に有効であろう。

2) 進路決定自己効力

進路決定自己効力について、1年生よりも2年生が高いことが明らかとなった。2年生はすでに進路選択や就職活動を経験しているために進路決定自己効力が高まっているのに対し、1年生はまだ就職活動を経験していないために高まっていないことが考えられ、当然の結果であるといえる。

資格学科学生の進路決定自己効力が1年生から高い理由としては、入学前に資格取得を目的として短大への進路選択を行っていることが、就職活動を経験したことと同様の効果をもつと思われる。短大生活においても具体的な進路について考える機会が多く、授業や実習なども進路に直接的に関連していることが、自己効力を高めることにつながるであろう。これに対し、教養学科学生は短大生活を通してさまざまな進路について検討し、その中から選択や決定を行っていくことが必要とされる。特に、1年生にとって進路選択はこれからの課題であり、まだ模索中の段階であるともいえる。また、高校時代に明確な進路決定ができなかったために、短大の教養学科に進学した者も少なくないであろう。教養学科学生は、進路決定自己効力が当初から低いことに加え、まだ高め

るまでは至っていないことがこの結果に影響したと考えられる。進路指導やキャリア教育において、1年生の時期からインターンシップに積極的に参加させ、選択や決定まで至らなくとも具体的な進路を考えさせることが自己効力を高め、就職活動における努力や自信につながるのではないだろうか。

表7より、進路決定において自己評価、情報収集行動をすることができるが、問題解決、進路選択、計画立案をとることができない傾向があると考えられる。富安(1997)は、大学4年生の時期はほとんどの者が進路選択と自己評価については一応の目安をつかんでいるのに対し、情報収集と計画立案についてはまさに取り組んでいる時期であるとしている。しかし、本研究結果は情報収集を行っているものの計画立案できないことを示しており、そのことが進路選択に否定的に働くだけでなく、今後のキャリアにおける問題解決にも否定的な影響を及ぼすと推測される。表8において、内定が得られていない学生、特に教養学科学生は進路選択や計画立案、問題解決が低いという結果も、これを証明しているといえよう。進路指導やキャリア教育において、収集した情報を生かして進路選択や決定をどのように計画していくか、また今後のキャリアにおいて生じるさまざまな問題をどのように解決していくかを考えさせていくことが、自己効力を高めるという点からも重要であり、進路決定においても重要な意味をもつと思われる。

内定の有無による進路決定自己効力について、内定を得た学生は高く、また資格学科学生は高いことが明らかとなった。上述したように、卒業後に資格を生かせる職種に就職することを目標としているため、内定を得ることが進路決定自己効力を高めたと考えられる。一方、高い進路決定自己効力をもつ学生は就職活動において自己効力の特徴である努力や粘り強さを発揮し、内定先を得ることができたのに対し、内定が得られていない学

生は就職活動で努力や粘り強さを発揮できていないため、その活動を有意義に行えていないことが推測される。進路指導やキャリア教育において、学生自身に目標を設定させ、それを成功させるということを経験させることが自己効力を高めることになり、就職活動において努力や粘り強さを発揮して内定を得るという結果に結びつくのではないだろうか。

5. 全体的考察

本研究は、職業探索や興味・関心の吟味期間が少ない短大生にとって進路指導やキャリア教育が重要であり、就職活動を通して自己成長力や自己効力を高めることが今後のキャリアに大きく影響することをふまえ、資格学科学生と教養学科学生の自己成長力、進路決定自己効力を調査することによって短大生の進路選択の効果について検討し、短大における進路指導、キャリア教育について検討することを目的とした。

自己成長力を高めるための進路指導・キャリア教育として、資格学科では早期に進路選択を行うことが成長力を高めることにつながらず、自己の興味・関心について深く吟味させ、進路選択を振り返ることが有効であり、教養学科では企業で求められている明るさや優しさについて考えさせ、経験させることで性格・生き方自己成長力をのばすことが有効であることが考えられた。また、学生の意欲・関心を実際の行動に導くように指導することが、進路決定や内定先の獲得に有効であるとともに、高い自己成長力をもたせるように指導・教育を行い、進路選択の結果ではなく過程を重視して、就職活動によって何が得られるかを学生に意識させることが内定を得るためにも重要であることが示唆された。

進路決定自己効力を高めるための進路指導・キャリア教育として、教養学科では短大生活において具体的な進路を考える機会を持たせ、進路に直接関連する授業を行うことや、情報収集を進路

選択や計画立案、問題解決にどのように生かすかを指導することが重要であると考えられた。また、内定を得ることが自己効力を高める一方で、高い自己効力をもつ学生は就職活動において努力や粘り強さを発揮できることから、学生に目標設定を行わせ、それを成功するという経験が自己効力を高め、後の就職活動に肯定的に影響することが示唆された。

今後、少子化や大学全入時代が進むにつれて、社会における短大の存在価値がますます問われるようになると思われる。そのとき、短大生が卒業後にどのようなキャリアをもっているかが短大に対する評価に大きく影響するのではないか。短大で進路指導やキャリア教育を行う上で、内定の獲得や職業適性の発見を援助するといった短期的なキャリア教育だけでなく、学生の卒業後についても視野に入れた長期的なキャリア教育を行うことは、大きな意味をもつであろう。本研究において、進路選択や就職活動は自己成長力、自己効力と密接に関連し、自己成長力と自己効力は強い相関をもつ($\alpha = .447$)ことが示された。卒業後のキャリアにおいて自己成長力や自己効力は大きく影響することから、これらをもつように進路指導・キャリア教育を行っていくことが、これからの短大に求められるのではないだろうか。

引用文献

- 安達智子 (2001) 進路選択に対する効力感と就職動機、職業未決定の関連について—女子短大生を対象とした検討—, 心理学研究, **72**, 10-18.
- Bandura, A. (1977) *Social Learning Theory*, NJ: Prentice Hall College Div.
- Bandura, A., & Schunk, D.H. (1981) Cultivating Competence, Self-efficacy, and Intrinsic Interest Through Proximal Self-motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 586-598.
- 藤本喜八 (1985) 進路指導の定義の歩み, 進路指導研究, **6**, 1-13.
- 速水敏彦・西田 保・坂柳恒夫 (1994) 自己成長力に関する

- る研究, 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **41**, 9-24.
- 文部科学省 (2007) キャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書—普通科におけるキャリア教育の推進—
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/06122007.htm
- 大久保功・石田 坦・西田治子 (2007) 18歳からのキャリアプランニング—これからの人生をどう企画するのか—, 北大路書房, 47-48.
- 太田さつき・岡村一成 (2006) 就職活動に対する自己効力感—測度尺度作成の試み—, 応用心理学研究, **32**, 65-75.
- Taylor, K.M., & Betz, N.E. (1983) Application of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.
- 富安浩樹 (1997) 大学生における進路選択自己効力感と進路決定行動との関連, 発達心理学研究, **8**, 15-25.
- 浦上昌則 (1996) 就職活動を通しての自己成長—女子短大生の場合—, 教育心理学研究, **44**, 33-42.

〔 2007年10月26日 受付 〕
〔 2007年11月30日 受理 〕